

キャディ・コンプソンの痕跡

—ウィリアム・フォークナー『響きと怒り』—

羽澄直子

A Trace of Caddy Compson

— William Faulkner: *The Sound and the Fury* —

Naoko HAZUMI

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の主要作品の一つ、『響きと怒り』 (*The Sound and the Fury*, 1929) は、コンプソン家の3兄弟、クエンティン、ジェイソン、ベンジーがそれぞれ語る3つの章と、「部外者 (作者) の視点」による4番目の章から成り立っている。「作者と読者のコンセンサスの拒絶」「クロノロジカルな時間の経緯の攪乱」「込み入った形式、文体」「意識の流れ」「複数の視点」といったモダニズムの手法を駆使し、“a new temporal and spatial reordering and even disordering of the external world” (Hlavsa 4) を試みたテキストは難解で、特に知的障害を持つベンジーの第1章と、悩めるハーヴァード大生クエンティンの第2章は、過去と現在、現実と夢が錯綜し、読者の理解を拒むような reorder, disorder された世界が展開する。混乱する読者はテキストに散らばる断片を拾い集め、ジェイソンの第3章、「部外者 (作者) の視点」による第4章を経て物語の全体像を把握しようとするが、その過程で明らかになるのは、一見ばらばらなコンプソン3兄弟の視線の先に共通するのは、コンプソン家の一人娘で彼らの姉妹である「失われた」キャディだという点である。

フォークナーは『響きと怒り』について、下着を泥だらけにした勇敢な少女のイメージから生まれた、つまり物語の源、始まりはキャディだと述べている (*Faulkner in the University*, 1)。¹ しかし彼はキャディには直接語る章を与えなかった。その結果彼女は、コンプソン家の物語の続括者でありながら、兄弟たちの視点から見た徹底的な他者として読者に提供される。「部外者 (作者) の視点」による第4章ではキャディは語られることはなく、テキストに登場するキャディは、兄弟の主観のみで形作られた存在となる。1957年にヴァージニア大学で行われたフォークナーと学生によるセッションでは、最初に「なぜキャディの章がないのか」という質問が出されたが、それに対して、フォークナーは次のように答えている。

...Caddy was still to me too beautiful and too moving to reduce her to telling what was going on, that it would be more passionate to see her through somebody else's eyes, I thought. (*FU*, 1)

フォークナーは自分の作品に対して必ずしも信用できるコメンテーターとは言えないので、この発言を鵜呑みにしてもかえってテキスト理解の妨げになるかもしれないが、信憑性はともかく、これが一つ暗示するのは、作者が女性に対して抱くロマンティシズムである。「キャディはあまりにも美しく感動的なので、彼女に何が起きているか語らせるなんてことはできない」というのは「美しい女性 (レディ、淑女) に悲劇的な人生を語らせるような無慈悲なことでは

きない」という昔の騎士道精神的思いやりに聞こえるし、「他人の目から見た方がより情熱的」は、「淑女は何も言わない方が奥ゆかしく神秘的でよい」という、女性を現実から隔離された理想像として祭り上げる南部社会の風潮を思い出させ、キャディを南部淑女として神話化する意図が感じられる。作者にとってキャディは特別に思い入れのある存在のようだが、その愛情ゆえ、彼女の自立を許さず沈黙させたとも言えるだろう。陶潔は「抑圧された声」の中で、キャディや他の作品の女性登場人物、『死の床に横たわりて』(As I Lay Dying, 1930) のアディ・バンドレンや『サンクチュアリ』(Sanctuary, 1931) の temple・ドレイクが沈黙させられていく過程を明らかにし、その沈黙を「女性を拘束し、定義し、形成し、支配し、さらには暴行さえも加える家父長社会とその文化の役割を暴露するフォークナーなりの表現方法」(89) と指摘する。家父長制が創りだした南部淑女像の欺瞞性は、例えばキャディの母コンプソン夫人にグロテスクに投影されているが、先に言及したフォークナーのキャディについてのコメントには、「家父長的支配に最終的に服従してしまうキャディ」(陶91) を南部淑女神話の犠牲者として描きながらもなお、彼女を神話から解放せず、中にとどめておきたいというアンビヴァレンスを感じられる。作者から哀惜の情を送られている南部淑女のヒロインといえ、*「エミリーに薔薇を」* (“A Rose for Emily,” 1930) のエミリー・グリアソンが有名だが、彼女と同じように、キャディも南部社会の “a tradition” (“A Rose for Emily,” 119) として庇護すべき存在として作者の中に位置づけられているようだ。

この他フォークナーはキャディのことを “my heart's darling” (FU, 6) と呼び、さらに「自分が一度も持つことのなかった姉妹 (フォークナーは男兄弟しかいない)」と「失う運命にあった娘 (最初の娘アラバマは生後まもなく死亡)」がキャディには投影されている、とも言っている。娘が亡くなったのは1931年で、作品出版後のことなので、それが実際のキャディ創作と関わりがあったとみなしてよいのかどうかは疑問が残るが、ここで作者の説に従えば、少女キャディは着想の時点から、存在しなかった姉妹と失われる娘、つまり「不在」と「喪失」を表象するものだったということになる。そうであれば、元々存在しない、あるいはまだ言葉を使えない乳児の段階で失われるものとして出発したキャディが、「発言しないもの／できないもの」と位置づけられるのは、ある意味妥当なのかもしれない。

フォークナーがキャディに託した旧南部への愛憎半ばする思いは、伝統的なリアリズムの手法で表現するには複雑で矛盾に満ちている。だからこそ reorder, disorder でひねりあげるモダニズムの実験的な手法が選ばれたのであろう。技法に関して目を引くのは、まず最初のベンジーの章である。言葉の使えない知的障害者が語るという、読者を戸惑わせる設定で始まり、時間の流れの観念を認識できないベンジーが、目の前にある瞬間をとらえ、そこから連想する場面を次々に表出していく。例えば屋敷に隣接する元はコンプソン家の地所だったゴルフ場で「キャディ」を呼ぶ声を聞くと、姉と過ごした出来事がよみがえり、やがてまた別の言葉や物に触発されると次のエピソードが鎖のように連なっていく。しかし時間も出来事も支離滅裂に表され disorder としか見えないベンジーの章は、注意深く読むと彼なりの order (秩序) に基づいて reorder された首尾一貫した世界であることがわかる。また記憶の中にある現実を何の加工もせず、そのまま表出することしかできない彼の語りは、実は伝統的なリアリズムの特徴を内包しており、彼の心の言葉を忠実にたどれば見かけほど理解の難しい章ではないのかもしれない。むしろ観念と妄想に彩られた「意識の流れ」が展開される次のクエンティンの章の方がひどく錯綜しており、3 ページにわたってコンマもピリオドもなく、一人称の “I” がすべて小文字 “i” で書かれるなど、彼の精神状態を反映するような破綻ぶりが見られるのである (*The Sound and*

the Fury, 219-222)。²

3人の兄弟は不在あるいは喪失の穴埋めをするかのように、自分が求めるキャディ像を描こうとする。キャディの喪失が持つ意味は、兄弟それぞれ違っている。ベンジーにとっては、彼を慈しみ庇護する母親、クエンティンにとってはコンプソン家の秩序と名誉、ジェイソンにとっては出世と金儲けの手段を失うことを意味している。それぞれの喪失の意味が、それぞれのキャディ像にも反映される。ベンジーのキャディは細やかな愛情に溢れ、誰に何を言われようとも自分のやり方で無垢な弟を守ろうとする意思の強い少女である。クエンティンのキャディは大切な愛しい妹だが、成長するにつれ彼女は彼の理解と制御を超える奔放さを発揮し、彼は兄としての自分の無力さを思い知らされることとなる。子どもの頃から姉に虐げられてきたと感じるジェイソンには、キャディは恐れと憎しみをかきたてる独裁者だったが、彼女の離婚でよい就職口を失ってからは、搾取の対象として蔑むべきピッチ（あばずれ）となる。

3兄弟に共通しているのは、自分たちの大切なものを奪ったのはキャディのセクシュアリティだという認識だ。彼女の性の目覚めとそれに基づく行為は「処女性喪失」として、両親と兄弟を混乱におとし入れる。没落する家の名誉をキャディの処女性に託していたクエンティンは、妹との近親相姦を妄想することで現実から目をそむけ、規範から逸脱した彼女の罪を覆い隠そうとする。ジェイソンは“Once a bitch always a bitch” (*SF*, 223) と言い、キャディのふしだらによって仕事のチャンスを奪われ、さらに彼女の娘の養育まで押しつけられたことを恨む。ただし2人が問題視しているのは、キャディのセクシュアリティそのものというよりは、彼女自身のセクシュアリティの扱い方であろう。妹を南部淑女とみなしたいクエンティンは、彼女と男たちの付き合い方について“*Why must you do like nigger women do in the pasture the ditches the dark woods hot hidden furious in the dark woods*” (*SF*, 113) と非難するが、同じ性体験でもそれが正規の社会慣例に従い家族の承認を得た恋愛と結婚によるものであれば、家名は傷つかず、彼女への咎めもなかったはずである。ジェイソンの場合、銀行への就職を約束してくれたのは、キャディの夫だった。彼は身ごもったキャディの不名誉を隠すための結婚相手だったので、もし約束が果たされていれば、ジェイソンは姉のふしだらに感謝こそすれ、責めはしなかったかもしれない。しかし妊娠が露顕してキャディは離婚され、ジェイソンの就職の話も立ち消える。その結果姉のふしだらには彼には許しがたい背徳行為となる。

一方ベンジーにとっては、キャディのセクシュアリティそのものが彼の秩序を乱す源だった。彼は姉が大人の女性に成長し、いつかは彼の母親役を放棄する日が来ることを本能的に感じ、恐れているようだ。どんな理由であれキャディが外の世界に目を向け、たとえ祝福された結婚で家を出ることになったとしても、常にそばにいて欲しい姉を失うことに変わりはない。ベンジーは兄弟の中でキャディのセクシュアリティに最も敏感に反応し、姉が香水を使ったり、大人のドレスを着たりして「木の匂い」がしなくなるたびに泣き叫び、彼女の性衝動を牽制する。キャディが初めて男性と関係を持った時には、汚れを洗い流せといわんばかりに彼女を浴室へ追いやってしまう。

こうしてキャディのセクシュアリティはそれぞれの理由によって兄弟たちから断罪される。3兄弟の語るキャディは自分の行動を正当化したり弁護することはなく、彼らからの責めを受け入れているように見える。ベンジーに泣かれるたびに意図を察して「もうしない」と彼を慰め、錯乱する兄の非難を受け止め、母の勧めどおり、家族の体面を守るために結婚する。結婚が失敗した後は娘を手放し家族から排除され、ジェイソンには養育費を搾取される。南部淑女には似つかわしくないという墮落の烙印を押された彼女には、旧世界の社会秩序やモラルの崩壊の

責任まで押しつけられる。マルコム・カウリーに請われて書いた1946年のアペンディクスで、フォークナーはキャディについて“Doomed and knew it, accepted the doom without either seeking or fleeing it” (SF, 412) と解説したが、兄弟の中でいつもリーダーシップを発揮し、自分をクイーンや妖精ではなくいつもキングや巨人、将軍に例えていた (SF, 215) 勝気で勇敢な少女は、処女性を失った時、コンプソン家においてはその存在価値さえ失った。こうしてキャディは沈黙したまま「喪失された存在」へと追いやられていく。

兄弟に対して絶大な影響力を持ち続けるキャディだが、喪失されたものとして表される彼女は、彼らが語れば語るほど抽象化し、実体不明な「空虚な中心」(Bleikasten 76) に陥っていくようだ。例えば3才の知能のまま33歳になったベンジーが思い描くのは、キャディ自身ではなくスリッパと火から連想する彼女のイメージにすぎない。クエンティンはキャディを家の名誉を象徴する処女性の管理者としか見ることができない。一族の中で唯一正気と定義づけられた (SF, 420) ジェysonだけは、キャディの娘ミス・クエンティンに憎い姉の姿を重ね合わせることでキャディを具象化させようとするが、結局は彼もキャディの代理を見つめているにすぎない。フォークナーは自らのキャディへのアプローチ方について「3人の兄弟に次々と語らせ、第4章も加えたが語りきれなかった」(FU, 1) と述べ、後年アペンディクスで家を出た後のキャディの消息を書き足して、多少肉づけされた別の角度から見たキャディ像を提供したが、兄弟の語りの中に幽閉される限り、彼女は「喪失した」ままの状態に置かれるのだろうか。沈黙から彼女の声や主体性を拾うことはできないのだろうか。

一つの可能性としては、兄弟によって reorder, disorder されたキャディを、今度は読者が reorder, disorder して読み直すという方法があるのではないか。彼女が喪失された存在となるきっかけは、彼女が処女性を失ったことにあるが、「失った」というのはあくまでも兄弟たちの視点に沿ったものであり、キャディにとっては新しい「経験の獲得」(藤平68)なのだ、という読みもできるのである。そう解釈すると、兄弟たちの語りが幽閉することのできなかったキャディの別の一面が見えてくる。父ミスター・コンプソンが“it was men invented virginity not women.” “it means less to women.” (SF, 96) とクエンティンを諭すように、処女性の喪失を問題視するのは男性であり、女性、そしてキャディにとっては「何の価値もない (“she placed no value whatever”）」(SF, 412) 事柄である。性的に成熟した彼女は、自分のセクシュアリティに忠実に行動し、新しい経験を心得て娘を産む。空虚どころかここには未来を創造する生命力あふれる女性像が現れてくる。コンプソン家からの抹殺は、南部淑女の呪縛からの解放につながる。喪失されたとされるキャディは、実は様々なものを獲得しているのである。一方兄弟たちはコンプソン家にとらわれた状態で、何も生まず何も獲得しない。クエンティンは性体験の欠如をキャディに同情されたまま自殺する。ベンジーは去勢され、ジェysonは子のない独身者として「腐りかけた家の腐りかけた家族という負担を全部背負い込む (“he assumed the entire burden of the rotting family in the rotting house”）」(SF, 421)。彼らはキャディの豊穡さを否定し、喪失に転換させようとする過程で、何も生み出せない自らの空虚さをさらけ出す。キャディの喪失を埋めるはずの語りは、自らの不毛さを埋める作業と化すのである。

語る主体クエンティン、ジェyson、ベンジーは、語られる客体キャディを支配できる立場にある。彼らは自分たちが見たと信じる、あるいは見たいと思うキャディを描こうとする。しかし彼らがキャディを語る上での共通認識である「処女性の喪失」という概念が読み直された時、状況は反転する。語りの中から、「新しい経験を獲得した」キャディによって未経験と不毛さをあぶり出された兄弟たちの姿が見えてくる。彼らは主体でありながら、語られる客体キャ

ディに支配されるように自分たちの欠如を語るのである。彼らに刻まれた、沈黙するキャディの痕跡は雄弁である。

注

1 以後このテキストからの引用は *FU* と省略して文中のかっこ内にページ番号を示す。

2 テキストは *The Sound and the Fury* (New York: The Modern Library, 1956) を使用。引用は以後 *SF* と省略して文中のかっこ内にページ番号を示す。

参考文献

- Bleikasten, Andre. "Caddy, or the Quest for Eurydice." *Caddy Compson*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1990. 73-83.
- Faulkner, William. "A Rose for Emily." In *The Collected Stories of William Faulkner*. London: Penguin Books, 1989. 119-130
- . *The Sound and the Fury*. 1929. New York: The Modern Library, 1956.
- Gwin, Minrose C. *The Feminine and Faulkner*. Knoxville: U of Tennessee P, 1990.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University*. 1959. Charlottesville: UP of Virginia, 1995.
- Hlavsa, Virginia V. James. *Faulkner and the Thoroughly Modern Novel*. Charlottesville: UP of Virginia, 1991.
- Matthews, John T. "The Sound and the Fury" : *Faulkner and the Lost Cause*. Boston: Twayne, 1991.
- Meriwether, James B. and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner*. 1968. Lincoln: U of Nebraska P. 1980.
- Raschke, Debrah. "Modernist Criticism." *A Companion to Faulkner Studies*. Eds. Charles A. Peek and Robert W. Hamblin. Westport: Greenwood, 2004. 99-124.
- Weinstein, Philip M. ed. *The Cambridge Companion to William Faulkner*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- 陶洁「抑圧された声 — フォークナーの三人の女性キャラクター」本村浩二訳『フォークナー』2(2000) :87-96.
- 藤平春子「ジョー＝アディーキャディーナンシー・複合体」『フォークナー』4(2002) : 65-74.

